

MACF礼拝説教要旨

2021年10月31日

【イエス様の洗礼そして生き方】

3:21 民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、

3:22 聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

3:23 イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。

＊＊

マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書はどれも、イエス様が最初に登場する場面として、ヨハネから洗礼をお受けになった出来事を伝えています。

1) イエス様の洗礼の意味

イエス様の活動は、まさに、ヨハネから洗礼を受けることによって始まりました。

しかし、そもそも、どうして主イエスは洗礼を受ける必要があったのでしょうか。

ヨハネの洗礼は、悔い改めの印としてのものでした。

神様に対する罪を認め、神様の方に向き変わることの印です。

イエス様は神の独り子です。しかも、ご自分でもその自覚をはっきり持っておられました。

両親にはわかっていなかったようですが、イエス様は自覚しておられました。

実はイエス様はただ一人、悔い改める必要のない、罪のない方でした、そのイエス様がどうして洗礼を受けるのか大きな疑問です。

マタイによる福音書では、ヨハネが、

「わたしこそあなたから洗礼を受けるべきなのに」と言って、

主イエスに洗礼を受けることを思いとどまらせようとしたことが語られています。

そのような思いが起ってくるのは当然のことです。

でも、ルカによる福音書には、そういうことは少しも語られていません。

「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて」と書かれているのです。

民衆の一人として主イエスも当然のこのように洗礼をお受けになったのです。

つまり、洗礼を授けたヨハネ自身、この方こそ自分が備えをしている救い主であられる、ということを知らずに主イエスに洗礼を授けたのではないか、と考えることができます。

ルカによる福音書7章18節以下には。獄中のヨハネがイエス様のもとに人をやって、「来るべき方はあなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」と尋ねさせたことです。つまりヨハネは、誰が来るべき救い主かを知らなかったのです。

マタイとルカではそこが違ってきます。

ルカにおいては、主イエスは何の変哲もない民衆の一人として洗礼をお受けになったのです。

そこに、罪ある人間との連帯意識を読み取ることができます。神の御子が、罪人のひとりとして、私たちと横並びになって洗礼を受けられたのです。

2) 聖霊の満たし

洗礼を受けた主イエスに、天から聖霊が鳩のような姿で降って来たこと、そして天からの声が聞こえたことも三つの福音書が共通して記しています。洗礼を受けた主イエスに、聖霊が降り、主イエスは聖霊で満たされたのです。そしてそこに、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という神様からの語りかけが与えられたのです。これらのことにはどんな意味があるのでしょうか。

主イエスが民衆の一人として洗礼をお受けになったことは、神様の独り子であられる主イエスが、悔い改めて罪の赦しをいただかなければならない私たち罪ある人間と同じところにまで降りてきて下さったことを意味しています。ご自身は本来悔い改める必要のない主イエスが、悔い改めの印である洗礼を受けることによって、私たちの罪を引き受けて下さる方とされたのです。そこに聖霊が降ったのは、神様がこの主イエスの歩みを良しとし、この主イエスによって救いのみ業を成し遂げて下さるご意志を示して下さったということです。

主イエスに降ったこの聖霊が、ペンテコステの出来事においては弟子たちにも降り、教会を誕生させ、そして今、私たちにも洗礼において降り、私たちをキリストの救いにあずかる者として下さるのです。

3) わたしの心に適う者：その生き方・在り方

そしてこの聖霊と共に与えられた天からの声、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という語りかけは、これから主イエスによって成し遂げられる救いのみ業の内容を示していると言えます。

「あなたはわたしの愛する子」という言葉は、詩編の第2編7節から来ています。父なる神様が、ご自分と主イエスとの間に父と子という深い愛の関係があることを明らかに示して下さることによって、これから主イエスが歩もうとしている苦しみに満ちた救い主としての働きを励まし、支えて下さる、その思いがここに現れていると言えるでしょう。

そしてその次の「わたしの心に適う者」という言葉、これこそが、主イエスによって

成し遂げられる救いのみ業の内容を示しています。

この言葉は、イザヤ書42章1節からのものです。

そこに、「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を」とあります。

ここの「わたしが支える者、選び、喜び迎える者」というところのギリシャ語訳聖書からこの言葉は取られています。

ここには、主なる神様のみ心に適う僕が選ばれ、立てられ、遣わされることが語られています。その僕は何をするのでしょうか。

2～4節には「彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。暗くなることも、傷つき果てることもない、この地に裁きを置くときまでは。島々は彼の教えを待ち望む」とあります。

この僕は、裁き、そして救いのわざをしめします。

しかしその裁き。そして救いは、「叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない」仕方で、つまり大声をあげて力づくで人々を支配し、裁くというのではない仕で行われるのです。そしてその裁きを彼は、「傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく」成し遂げるのです。

傷ついている者、弱っている者が、この裁きにおいて断罪され、滅ぼされてしまうのではなく、むしろ赦され、救われていくのです。どうしてそのような裁きが可能なのでしょうか。

イエス様自らが、「しもべ」として生きることを通してその愛と誠実さを示し十字架にかかることで私たちの罪の代価を支払ってくださったことによってです。そのように歩む主イエスこそ、父なる神様のみ心に適う者であり、またその主イエスを、父は「愛する子」と呼んでおられるのです。

そして、それは私たちの中に育てられるべき生き方でもあります。「しもべの心をもって生きる」のです。

祝福がありますように。

*

今週金曜日にはバイブルワークショップが開催されます。

初めて参加希望の方は、 pastor.kaz@gmail.com までメールをいただければZoomの招待状を送ります。